

『傷心の家』とソクローフ『痛ましき無関心』における麻痺のモチーフ

松本 望希

1. はじめに

本発表の目的は、20世紀イギリスで活躍した戯曲家 Bernard Shaw の作品である『傷心の家』(*Heartbreak House*, 1920) と、それを原作にした、Alexander Sokurov 監督のロシア映画『痛ましき無関心』(*The Mournful Indifference*, 1987) について分析し、戦争が社会に与えた「麻痺」について考察することである。ここでは共通して、第一次世界大戦を経験したヨーロッパが、どのように変容していったのかということが描かれる。時代と場所を異にした両作品ではあるが、根底に流れるテーマはほぼ同一であり、戦争という悲劇的出来事を経験したのちにもかかわらず観客にその後の世界に希望を抱かせるものである。Jeremi Szaniawski は、制作陣がこの映画で “the spirit of idleness and dereliction which characterised the Soviet Union of the early 1980s” (49) を否定しようとしたと主張する。確かにそうした政治批判は原作とも共通するものではあるが、その一方で、Sokurov が追及しようとしたのは、より普遍的なテーマであるように思われる。本発表では、「麻痺」というモチーフに注目し、『傷心の家』と『痛ましき無関心』における共通点を探る。

2. 第一次世界大戦との関わり

Heartbreak House の序文は、この劇の名前の由来についての一節から始まる——“Heartbreak House is not merely the name of the play which follows this preface. It is cultural, leisured, Europe before the war. When the play was begun not a shot had been fired” (7)。だが、戦前のヨーロッパを描くという Shaw のこの言葉に反し、特に本作品の第3幕においては、はっきりと言及はされていないものの、ツェッペリンの空襲や戦時の灯火管制を彷彿とさせるシーンが描かれる。しかし、第3幕の灯火管制やツェッペリンによる空襲を思わせる描写や、執筆時期が大戦中の1916-17年であることから考えると、作者の言葉は信頼しがたい。

本作品と第一次世界大戦を関連付けさせる要素のひとつである、ラストシーンにおけるツェッペリンの爆撃は、実際の Shaw の体験に基づいて書かれたものである。1916年10月5日の Sidney Webb 夫妻への手紙の中で、彼は自宅の近くをツェッペリンが飛来し、翌朝墜落した機体とドイツ兵の遺体を自転車で見に行ったことについて、興奮した語り口で触れている。ここで Shaw は、ツェッペリンの飛行や周囲の様子を克明に記し、作品のラストシーンの登場人物たちと同じく、「ツェッペリンが明日もまた来たらいいのに」という欲望に駆られたことを喜びに告白する。そして、自分たちがどれほど獣性に満ちているかということに対して感嘆の声をあげる。Shaw はイギリスの敵国であるドイツの飛行機がやってきたにもかかわらず、それを怖がったり逃げようとしたりもしない。それどころか、あまつさえ戦争の激化を望むような彼の興奮は、戦時下に置かれていないわれわれにとっては、驚きとともに受け止められるかもしれない。

だが、戦争という極度の緊張状態に長期間留められたイギリス国民たちの心は「麻痺」し、ツェッペリンの襲来をまるで祝い事のように捉えるようになっていたとも考えることができる。Ariela Freedman は、ツェッペリンが戦時中、単に戦争の恐怖を煽るというより、頻繁に襲来してくることから目新しさを失っていたものの、崇高さを伴った空中のスペクタクルとなっていたことを指摘する (49)。Shaw や登場人物たちが感じたこのような驚きは、ひいては観客たちのものとも重ね合わせることができるのではないだろうか。戦後間もない観客たちにとっても、当然ツェッペリンに対するそうした感覚は既知のものだったと推測される。戦争という大きな出来事に対して、彼らは感覚が鈍麻しており、無感覚なのである。「心が壊れてしまった」のは、傷心の家の人々だけではなく、作家、そして観客たちも同様と言えよう。

2. *Heartbreak House* のアダプテーション

このように、文字通り「心が壊れてしまった」人々を描く *Heartbreak House* であるが、それを原作とし、Alexander Sokurov 監督によってロシアで映画化された *The Mournful Unconcern* (1987) でも同様に、「麻痺」してしまった登場人物たちを見出せる。この映画の冒頭には、“Anaesthesia Psychica Dolorosa”——すなわち「悲痛な心理的無感覚」を意味するラテン語の造語が画面上に映し出される。19世紀に成された、ドイツの精神医学者 Friedrich Schäfer によるこの症状の定義は、一種の神経症、特にうつ病の病状を指すものだが、家の外で起こることには目を向けず、ただただ恋愛に興じるこの映画の登場人物たちの様子と同様に重ね合わせることができる。この症状に陥った患者は、身体的な能力として見たり聞いたりすることはできるものの、自分の内部の空虚さ

がどのようなものであるか周囲に伝えたり、感じたりすることができない。それは、ある種の感覚の欠落であり、精神的に麻痺していると言える。爆発音や銃声が響く中、Ellie は自分の家族たちについて「周りは常に戦争なのにうちでは誰も気にしない」と呆れたように述べます。ですがこの映画の登場人物たちは今まさに起きている戦争を敢えて無視しているのではなく、それを感じようとする能力が働いていない。ここで Sokurov は、戦争を意にも介さず恋愛に耽る彼らを批判しようとするのではなく、彼らをそのような状態にさせてしまった戦争のほうを非難の槍玉に挙げる。原作において Shaw が批判したのは、知的・経済的にも十分に能力を持つにもかかわらず、政治には消極的で無関心な態度を取る中産階級の人々だった。一方で映画の登場人物たちがそれほど恵まれた階級に属しているような描写はほとんど見受けられず、「有閑的」とは言い難い。それゆえ、力点が置かれているのは、むしろ彼らの「心を壊してしまった」戦争のような悲劇的体験にあると言える。

3. 結び

Heartbreak House は、その副題 “A Fantasia in the Russian Manner on English Themes” が示す通り、英国だけでなくロシア、そしてヨーロッパ全体に普遍的に存在する、大戦の惨禍が生み出した「心が傷ついた」人々の物語である。Hector は「傷心の家は英国そのものである」と述べるものの、彼らの状況は何もイギリスに限ったことではなく、ヨーロッパ全体の事象に敷衍できる。傷心の家の住民たちは、社会の変革からは目をそらし、自分たちの趣味や恋愛に夢中である。それを通して、Shaw は機会にも階級にも金銭にも恵まれているにもかかわらず、政治には無関心な中産階級の姿を本作品において浮かび上がらせる。だがその実、作者自身でさえも、ツェッペリンの空襲に際してはそれをスペクタクルとして捉え再度の空襲を熱望するという、ある種プリミティブな感情を抱く。この点において、戦争は人々の心を鈍麻させているのであり、Shaw は、戦争が直接的ではないものの人間の精神を侵襲し人間性に影響を与えていることを明らかにする。ただし、Shaw の戦争に対する捉え方は、けっして悲観的なものではなく、淡々と傷ついた人々が存在するという事実を提示しているように見える。そこには、どちらにも偏ることのないものの、だからこそその悲しみが見出せるようでもある。

そうした Shaw の創作スタイルを受け継ぎ、Sokurov も同様に、大戦に際して「心が壊れて」しまった人々を *The Mournful Indifference* において描く。原作以上に奇妙な展開を見せるこの映画だが、関連のないように見える断片化されたプロットは Sokurov によって丹念に意図されたものであり、Shaw の原作が毀損されているわけではない。この映画では、Shaw の作品と比べると一層、「心を壊してしまった」人々のほうに注目している。作中、ほとんど常に鳴りやまない銃撃や爆発の音によって、登場人物だけではなく視聴者は、戦争の存在を意識せざるを得ない。その結果それに段々慣れていくことで、観客たちは戦争への感覚の鈍麻をともに体験することとなるのです。あたかもシェルショックに苦しむ帰還兵のように、戦争の音は彼らの中で反響する。しかし、この映画で描かれるのは、戦争の破壊的な力のみではない。ラストシーンで示されるように、そこにはまだ希望が残っているのであり、Sokurov による Shaw 作品の解釈の方法が垣間見えるように思われる。

参考文献

Freedman, Ariela. “Zeppelin Fictions and the British Home Front.” *Journal of Modern Literature*. Vol. 27, no. 3, 2004, 47-62.

Shaw, George Bernard. *Heartbreak House: A Fantasia in the Russian Manner on English Themes*. Penguin, 2000. あああ

Szaniawski, Jeremi. *The Cinema of Alexander Sokurov: Figures of Paradox*. Columbia UP, 2014.

アレクサンドル・ソクーロフ監督『痛ましき無関心』紀伊国屋書店、1986。